

# ネガティブなアイデアの共同生成作業による 否定的価値観の相互理解の試み ～ 婚活パーティを対象として ～

福盛貴浩<sup>†1</sup> 高島健太郎<sup>†1</sup> 西本一志<sup>†1</sup>

概要：いわゆる婚活パーティの目的は、生涯の伴侶となる相手を見つけることである。そのためには、価値観の相互理解が必要である。特に、「これは許しがたい」という否定的な価値観が一致しない場合、共同生活の維持・継続に致命的な影響を及ぼす。ところが、従来の婚活パーティなどでは、このような否定的価値観を開示し、理解し合うことが行われていない。そこで本研究では、主に婚活イベントでの活用を想定した、発散的思考技法を応用した否定的価値観の開示・共有手法を提案する。婚活パーティの参加者同士で共同して、ネガティブなアイデアを考案することにより、否定的な価値観の開示と共有が可能となると考えられる。現在、提案手法によって、好ましくない雰囲気になることなく、否定的な価値観を開示・共有できるかどうかを検証する実験を行った。

## 1. はじめに

パーティなどの社交イベントは、多種多様な人たちが良好な人間関係を構築するための場である。そこで重要となるのが、他者とのコミュニケーションを通じて自分自身に関する情報を他者に伝達する自己開示である。本研究では、社交イベントとして、いわゆる「婚活パーティ」をとりあげる。婚活パーティは、生涯暮らしを共にするパートナーとなる候補者を見つけるための社交イベントである。それゆえ、婚活においては、コミュニケーションを通じて互いに自己開示を行い、相互理解を深めることが特に大事な要素となる。

しかしながら、婚活パーティにおいて、初対面の相手といきなり会話して相互理解を深めることは容易ではない。そのため、近年の婚活イベントでは、ただ参加者同士が会話する時間を設けるだけでなく、一緒に料理をしたりチームを組んでスポーツを行ったりするような共同作業を採り入れるなど[1]、より効果的・効率的な自己開示と相互理解を実現するための様々な工夫が試みられている。こういった工夫により、ある程度立ち入った情報の自己開示が可能になりつつある。ただしそれでも依然として、必要十分な自己開示がなされているとは言いがたい。ふたりの人間が、一生涯という非常に長い期間にわたって生活を共にするパートナーとなるためには、単に相手の表層的な情報や特徴について知るだけでなく、共通の価値観を有しているかどうかを知ることが大事である。

価値観とは、大辞林によれば「いかなる物事に価値を認めるかという個人個人の評価的判断」のことである。一般的には「どのような物事に『好ましい』価値を認めるか」という肯定的な価値観のみを考慮対象とすることが多い。婚活においてもこれはもちろん必要であるが、結婚という共同生活を送るにあたってより重要なのは、「これだけはイヤだ、これだけは許せない」というような、物事に対する

否定的な価値観が一致していることである。否定的価値観の齟齬や衝突は、共同生活の維持・継続に致命的な影響を与える。この点については、石川県の委託を受けて多くの婚活イベントを主催してきた企画運営担当者に対して本稿第3著者が行ったインタビューの中でも指摘されている。

ところが、従来の婚活イベントでは、趣味や好きな物事、得意な物事などの肯定的な価値観のみが開示・共有されてきた。否定的な価値観を開示し、共有し、理解し合う機会はほとんど提供されてこなかった。その大きな理由のひとつが、婚活イベントという明るい未来を創り出すための場において、否定的なことを語り合うような行為がそぐわないため、そのような情報の自己開示と共有の必要性を認識しつつも実施しづらいという事情があるものと推察される。

本研究ではこの点に着目し、主に婚活イベントでの活用を想定した、発散的思考技法を応用した否定的価値観の開示・共有手法を提案する。さらに、提案手法によって、好ましくない雰囲気になることなく、否定的な価値観を開示・共有できるかどうかを検証する実験を実施し、その初期的な結果について報告する。

## 2. 先行研究

婚活パーティにおけるコミュニケーションの支援に取り組んだ研究事例は、筆者らの知る限りにおいてほとんど見当たらない。数少ない研究事例として、短時間に次々と相手を換えてコミュニケーションを行う Speed Dating と呼ばれるスタイルの婚活パーティを対象として、コミュニケーションの心理的障壁を軽減させることを目的とした、会話代行ロボットに関する研究[2]がある。この取り組みでは、婚活パーティの各参加者があらかじめ記入したプロフィールシートに基づいて会話シナリオを作成し、これに基づきロボット同士が会話する。参加者らは、自分のプロフィール情報に基づき話すロボットと、相手のプロフィール情報に基づき話すロボットの会話を、無言でただ聞いているだけでよい。これにより、自慢話と捉えられるような話題でも、本人の意思とは関係なくロボットが勝手に話したとい

<sup>†1</sup> 北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科  
Graduate School of Advanced Science and Technology,  
Japan Advanced Institute of Science and Technology

う責任転嫁の状況を作ることができるなど、自分の口で話すよりも良好な自己開示を行えるようになる可能性が示されている。しかし、この取り組みでも、開示される情報は従来の普通の婚活イベントと同様であり、否定的な価値観の開示や共有は行われていない。

婚活イベントではないが、学会やビジネスイベントなどで見られるパーティにおけるコミュニケーションの支援を試みた研究例は多い。一例として、若年層を含む気弱な人々を対象としたコミュニケーション機会形成支援ツール ShyQueue[3]がある。これは、話したい相手に「あなたと話したい人が待っています」という情報を通知するシステムで、自分がコミュニケーションを取りたいと感じた人とコミュニケーションを取ることができるようにするものである。また、常に固定メンバーで固まっている人に対してシステムを使用することで、新たな人を会話の輪に巻き込み、新しい人脈形成を促す効果がある。しかし、意中の相手に対して積極的に働きかけるというよりは、むしろ通知を送った相手側からの働きかけを期待する受動的な機会形成支援になっている点で、積極性を求められる婚活イベントへの応用はあまり適切ではないと考えられる。

より一般的な、初対面の者同士によるコミュニケーションの支援に関する研究例も多い。このうち、自己開示に関連する研究事例には、以下のようなものがある。岡本は、日本人の初対面における話題は、年齢、住所、家族構成といった生活形態に関するものなど表面的な会話内容が大半であり、でき事に感動したなどの自分の感情や意見や価値観に関する内面的な話題は少ないことを示した[4]。竹内は、親友、友人、顔見知り程度の友人に対する自己開示に関して調査した[5]。これによれば、男女ともに、相手に対して開示しやすいのは、趣味の情報である。趣味の開示は自分のことを知ってもらうための自己紹介の役割を持っている。さらに、趣味は間をもたせるための役割を持っており、どのような相手に対しても話しやすい内容である。逆に、開示しにくいのは、男女ともに、性的側面、血縁的側面である。家族についての心配事を家族に話すことは妥当であるが、友人に話すのは、たとえ有益な助言が得られたとしても、恥ずかしいことであると考えられている。

このように、先行研究の多くでは、自己開示を行う際には、共通の興味や、ポジティブな趣味・価値観といったテーマが用いられてきた。ハイダーのバランス理論[6]によれば、2人の人間と1つの対象について、自分が対象に正の心情を抱いているとき、相手も共に対象に正の心情を抱いていると推測すれば、相手に対し正の心情を抱くことが指摘されている。それゆえに、共通するポジティブな対象が話題とされてきた。

一方で、バランス理論によれば、互いが対象に負の感情を抱いていた場合も、人同士は正の心情を抱くことも指摘されている。このことから共通する嫌いなもの、苦手なも

のといったネガティブ情報は、互いが親近感を感じ、コミュニケーションを始めるきっかけになりうると思われる。また、ネガティブな情動体験は、その経験や関連する感情を他者に話したがる傾向が指摘されており[7]、外部からのきっかけがあれば、積極的な自己開示が行われる可能性はあると思われる。また、悩みなどのネガティブ体験の聞き手の感情を分類した調査研究[8]では、「寄り添い」、「衝撃」等とともに「自分の経験との重ね合わせ（具体例：実際に自分も似ている状況だったので安心した）」といった内容が挙げられており、共通の経験があれば、ネガティブ情報により相手に正の感情を抱く可能性は高い。

このため、ネガティブな話題の有用性を指摘する研究もいくつか存在する。丹羽と丸野は、自己開示の深さと人間関係に関して調査し、開示者の性格特性の未熟な部分をさらけ出すことで相手に自分のことをより知ってもらい、関係性への発展につながることを指摘した[9]。また織田らの研究では、嫌いな物事や苦手な物事といった共通のネガティブな情報からコミュニケーションを触発することを試みている[10]。実験では、被験者全員が一致して嫌いあるいは苦手とするネガティブ情報を提示した。これにより、コミュニケーションが開始され、ネガティブ情報に関する会話を起点としてポジティブ情報に関する会話が展開されたことを確認している。

ただし婚活イベントにおける会話では、一致する否定的価値観の共有だけではなく、一致しない否定的価値観を見いだすことも重要になると、我々は考えている。婚活イベントでは、合う相手を見つけるだけではなく、本当は合わない相手を誤って合う相手であると認識してしまわないことも重要だからである。それゆえに、一致する否定的価値観を選び出し、それだけについてコミュニケーションするだけでは、不十分であると考えられる。

本研究では、婚活パーティにおけるコミュニケーションを対象として、ポジティブな話題ではなくネガティブな話題についてコミュニケーションすることにより、否定的な価値観の開示と共有を可能とする手段を提案する。この点において、本研究は従来のコミュニケーション支援研究には無い新規性を有すると考えられる。

### 3. 提案手法

本研究では、集団による発散的思考技法のひとつであるブレインライティング(BW)[11]を婚活イベントに導入し、通常とは逆に「望ましくない」アイデアを共同発想する Negative BW 手法を提案する。これにより、好ましくない雰囲気になることなく、否定的な価値観の開示・共有を可能にすることを目指す。

通常のブレインライティングの基本的な実施手法を説明する。参加者は6人であり、それぞれアイデアシートを1枚ずつ持つ。5分間で各自が3つアイデアを考えてシー

トに記入し、アイデアを記入したシートを隣の人に回す。この作業を6回、30分間繰り返すことにより、全部で108個のアイデアを出す発散的思考技法である。隣の参加者から渡されたアイデアシートにすでに記入されているアイデア群を参照することはもちろん許されており、それに触発されたり便乗したりして発想を広げることが求められている。

我々は、このような複数人で共同して行うアイデア生成活動が、価値観の開示と相互理解につながる手段となると考えた。発散的思考におけるアイデア発想では、アイデアの柔軟性を高めるために、個人が自身の持つ多様な観点から発想することが求められる。各自が自身の持つ多様な観点からアイデアを生成して提示することにより、個人が持つ観点が開示される。また、一般的には各自が「良い」と考えるアイデアを生成するので、肯定的な価値観も同時に開示されると思われる。実際、福永ら[12]によると、自らの表現意図は、無意識のうちに過去の経験や既習した知識・技能をもとに発想や構想を練りながら、自分の思いや考えを開示するため、創造活動は自分の価値観を抽出するきっかけとなることが指摘されている。こうした観点や価値観に関する情報を含む他者のアイデアを見ることにより、相手の考え方や価値観を知ることが可能となるだろう。また、自分が提出したどのアイデアに他者が触発されたり便乗したりするかを見ることによっても、その他者が持つ観点や価値観をより深く知ることができるようになると思われる。

なお、同様の効果はBWだけではなく、他の発散的思考技法によっても得られると思われる。しかし、たとえばより普及しているブレインストーミングを採用した場合、参加者の積極性によって発言頻度や発言量が偏るため、全員から均等に情報を得ることが難しくなる。そこで、誰もが同じアイデア提出機会を得ることができる手段として、BWが優れていると考え、これを採用した。

前述のように、BWを含む通常のアイデア生成活動では、「良いアイデア」の創造に取り組む。しかしながら、Negative BWでは、全員で協力して「悪いアイデア」を産み出す作業に取り組む。これは、1章で述べたように、生涯のパートナーを見つけるためには否定的な価値観を開示・共有することが重要であり、これを実現するためである。たとえば「できれば住みたくない家を考案して下さい」というような、生活に密着したネガティブな物事に関するテーマを与えると良いだろう。このようなテーマについて生成されたアイデアを開示・共有することにより、否定的な価値観の相互理解が可能になると思われる。

従来から、Reverse Brainstorming[13]あるいはNegative Brainstorming[14]と呼ばれる手法が提案されている。これは、いきなり問題を解決する手段を考案するのではなく、まず問題を悪化させる要因や手段を考案し、その後、考案された要因や手段を反転させることで、最終的には問題を解決

する手段を考案するという、オリジナルのブレインストーミングに一手間を加えた改良手法である。本研究で提案するNegative BWも、まず悪いアイデアを考案する点で、基本的にはこれらの手法と類似している。ただし、その目的は、良いアイデアを生み出すことではなく、何をNegativeと考えるかという否定的価値観の開示と相互理解にある点が異なっている。

## 4. 基礎的評価実験

Negative BWによる価値観の開示と共有の実現に関する基礎的な可能性を調査するための実験を実施している。本実験は現在進行中であり、まだ結果を示せる段階には至っていない。それゆえ、以下では実施中の実験の実施概要についてのみ示す。

### 4.1 実験手順

実験の手順は下記の通りである。

- 参加者：筆者らが所属する大学院の学生6名
- 実験時間：60分
- 実験手順：
  - (1) 6人がテーブルに座り、実験開始前にそれぞれ簡単な自己紹介(所属や名前紹介など)を実施する。
  - (2) 参加者全員にアイデアシートを配布し、実験の流れを説明する。
  - (3) 以下のNegative BWのテーマを与える：  
「こんな居住地には住みたくない、暮らしたくない」
  - (4) Negative BWを実施する。
    - ① 各自5分間で3つのアイデアをアイデアシートに記入していく。
    - ② 記入後、アイデアシートを隣の人に渡す。
    - ③ アイデアに困った場合、すでに記入されているアイデアを参照し、それに触発や便乗して新しいアイデアを生み出してもよい。
    - ④ アイデアを生成する際に参照したアイデアには、矢印を付けておく。
    - ⑤ 以上の手順を6回繰り返す。
  - (5) 最終的に、30分間で108個のアイデアが生成される。
  - (6) 全員ですべてのアイデアシートを閲覧し、共感するアイデアにチェックする(複数可)。
    - ① チェックする際に「1. やや共感する」、「2. 共感する」、「3. 非常に共感する」の3段階で評価する。
    - ② 誰がチェックを付けたのか、名前などを入れて、分かるようにしておく。

### 4.2 実験に関するインタビュー

提案手法が否定的価値観の開示と共有に有効であるのかを検証するためのインタビューを行う。

- (1) 上記実験に参加した被験者とは別の評価者 3 名に依頼して, Negative BW の結果として得られるアイデアシートに記入されている情報から,
- ① 各被験者がどのような否定的価値観を持っているのか,
  - ② 各被験者の否定的価値観が, 他のどの被験者の否定的価値観と共通しているのか, について推測してもらう.
- (2) 上記の推測結果が本当に正しいかどうか, 各被験者にインタビューして確認を行う.

なお, (2)のインタビューでは, 全被験者に必ず問う質問項目を事前に用意して, これを中心にインタビューを行い, 必要に応じて追加の質問を付け加える半構造化インタビューを行う.

以上の結果から, (1)の第三者の推測結果が, (2)での本人の認識と一致すれば, 提案手法は否定的価値観の開示と共有に有効であると結論づけられる.

## 5. まとめ

本研究では主に婚活イベントでの活用を想定した, 発散的思考技法を応用した否定的価値観の開示・共有手法を提案した. 婚活パーティにおけるコミュニケーションを対象として, ポジティブな話題ではなくネガティブな話題についてコミュニケーションすることにより, 否定的な価値観の開示と共有を可能とする手段である. 現在, 提案手法によって, 好ましくない雰囲気になることなく, 否定的な価値観を開示・共有できるかどうかを検証する実験を実施中である.

## 参考文献

[1] 高見彰, 水沢利栄, 勝木洋子: スポーツが効果的な婚活イベ

- ントに果たす役割, 2015 年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, p.127, 2016.
- [2] 岩本拓也, 栗原一貴, 絵空摩耶, 瀬川雅弘, 西本一志: ロボットエージェントが会話を代行する婚活パーティ, HAI シンポジウム 2016 予稿集, P-1, 2016.
- [3] 吉村 祐紀, 西本 一志: 気弱なパーティ参加者のためのコミュニケーション機会形成支援メディア, 情処研報, Vol.2017-GN-101, No. 17, pp.1-7, 2017.
- [4] 岡本佐智子: 日本人の自己紹介における自己開示, 北海道文教大学論集 (7), pp.51-63, 2006
- [5] 竹内由美: 大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係, 心理相談センター年報, 第 6 号, pp.15-22, 2010.
- [6] Dorwin Cartwright and Harary Frank: Structural balance: a generalization of Heider's theory, Psychological review, 63(5), pp. 277-93, 1956.
- [7] 川瀬隆千: 感情を語る理由: 人はなぜネガティブな感情を他者に語るのか, 宮崎公立大学人文学部紀要, 7(1), pp.135-149, 2000.
- [8] 泉谷京: ネガティブな自己開示における非開示者の感情・行動及び開示者との関係, 弘前大学大学院教育学研究科修士論文, 2012.
- [9] 丹羽空, 丸野俊一: 自己開示の深さを測定する尺度の開発, パーソナリティ研究, 18(3), pp.196-209, 2010.
- [10] 織田慎一郎, 高島健太郎, 西本一志: NegAWARE: 共通のネガティブ情報の開示によるコミュニケーション開始, 継続支援に関する基礎的検討, インタラクション 2019 論文集, 3P-72, pp.954-957, 2019.
- [11] A. B. VanGundy, Brain Writing for New Product Ideas: An Alternative to Brainstorming, Journal of Consumer Marketing, Vol.1, No.2, pp.67-74, 1984.
- [12] 福永真弓: 自分なりの価値観をもち, 創造活動に取り組む生徒の育成 —「みる力」を育て, 自分らしい表現につなげる授業を通して—, [http://www.cabinet-cbc.ed.jp/data/kenkyu\\_happyoukai/H26/26%20fukunaga.pdf](http://www.cabinet-cbc.ed.jp/data/kenkyu_happyoukai/H26/26%20fukunaga.pdf), 2013.
- [13] Nina Evans, Destroying collaboration and knowledge sharing in the workplace: a reverse brainstorming approach, Journal of Knowledge Management Research & Practice, Vo. 10, Issue 2, pp.175-187, 2012.
- [14] Michael S. Dobson, Creative Project Management, McGraw-Hill Education, 2010.